

総合科学部



① 広大を探せ

のどかな田園風景。
よく近づいてみると……。



② 広大発見！

これが新広大キャンパスだ！

雨降り ③

雨日の総科周辺。靴はドロドロ、
服はビトビト、廊下はグチョグチョ。



④ 授業前

人気のある授業はつらいよ。
授業は始まらねど、毎週のよう
に椅子取りゲーム。



in 西条

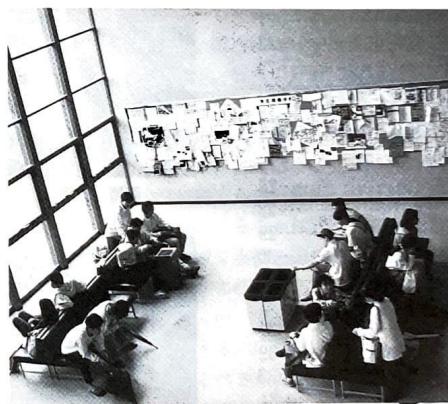
⑤ 自転車

早く駐輪場できないかな（5月）。
(現在では屋根なし駐輪場ができます。)



グラビア案内

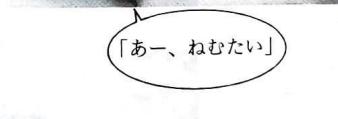
4月からスタートした西条での生活。住めば都と思いこむにはまだ時間がかかりそうだが、日に日に完成に近づく西条キャンパスを観察するのも楽しいものだ。ともすれば見逃してしまいそうな西条ならではの生活の様子を記録してみた。西条キャンパスに来たことのない人も、毎日通いつめている人もお楽しみあれ。



⑥ ロビー

憩いのひととき。

「ねえねえ、聞いてよ」



食堂 ⑦

西2生協二階の食堂部はカフェテリア方
式。まず入り口で取った盆に各コーナーで
食べたいものを載せていく出口のレジで清
算する。好きなものを選べるのはうれしい。



目次

1993年9月1日

飛 翔

第45号

卷頭言—雨は降る降る、ものみな濡れる：戸田吉信……………1

特 集

いま改革の時—変わられるのか—

I部 大綱化と大学教育

大綱化と総合科学部：生和秀敏	2
総合科学部のカリキュラムはどう変わるか：稻田勝彦	3
教養的教育を大事にしたい：田中裕子	5
<hr/>	
II部 現場の声 学生の思い	
ケース1：川村由紀	6
ケース2：東谷陽子	7
ケース3：川口優子	8
<hr/>	
異論・反論・Objection	
その1：岸本孝子	9
その2：村田雅洋	9
<hr/>	
III部 再び総合科学部とは：古田智子	13

小特集1：総合科学部 in 西条

総合科学部棟の内と外（写真グラビア）	16
今がチャンス：中村 猛	21
西条キャンパスそこが知りたい：長坂鉢・浜田文子・井戸田典子	22
大靈界への加速：高島裕臣	24

小特集2：総科フレキャンスタート

全学オリキャンから総科フレキャンへ：上小城敬幸	26
難産を乗り越えて実現したオリキャン：嶋屋節子	27
フレンドシップキャンプ'93：石田宣子	28
スタッフからみたフレキャン：森元俊一朗	28
フレキャンに参加して：里村多香美	29
オリキャンに参加して：中山広明	30

エッセイ

夢—現実そして夢：安仁屋宗正	31
大陸移動説と固定・常識観念：早瀬光司	32
楽しかった20年：大田素子	33
大学院生となって：徳留善幸	34
大事にしたいきっかけ：藤井恵美	35
Pさんの告白：篠崎陽平	36
西条にきて思うこと：村上とよ	37

社会からの声

プロ意識で大暴れ：中家伸之	38
---------------	----

新任教官紹介	39
倉石先生追悼文	42
学部記事	43
読者からの手紙	47
編集後記	49

広島大学総合科学部広報委員会・飛翔編集委員会

表紙：榎原恵子／岡崎麻祐子
目次：村田雅洋

* 表紙・裏表紙について
ついに西条への移転を完了した
総合科学部。表紙の写真は、その
新しい総合科学部の姿を撮影した
ものである。また裏表紙では、西
条キャンパスへのアクセス方法と
キャンパス内の地図を紹介している。

雨は降る降る、ものみな濡れる

戸田 吉信（総合科学部長）

例年になく雨が多い。そのせいか、7月の声を聞いても大気は爽やかな、清涼の気に包まれている。霧にかすみ新緑に映える鏡山公園一帯は、はっとするほど清々しく、美しい。朝夕、心洗われる思いがするのは私だけではあるまい。

やつと一段落ついたと言うべきか。東千田地区旧校舎の第一小会議室、移転実施本部三ヵ月の情景が、一片の影絵のように、いま私の脳裏に去来する。それはまさしく戦さ場であった。揃いの鎧（青緑色の作業服）に身を固め、評定に余念のない侍大将たち。風のごとく現れては去って行く伝令の母衣武者。一進一退を繰り返す教官と事務官の集団。その戦さ場で飲んだコップ酒、一杯のラーメンの味がなんともなつかしい。

ともかく、猫額の地を捨て、広々とした新天地に新たな城を構えた。当初、どこまで続く泥濘ぞと思われた、周辺の環境整備もとどこおりなく進行中、図書館の一部は学生用に開放してもらった。梅雨を迎えて学生の当面の溜まり場も、これでなんとか確保できた。その他諸々。この間、八面六臂の活躍をしてもらった担当の各委員会、事務長はじめ事務官諸兄のご努力、それに学長・局長以下事務局の方々の深いご理解に、厚く御礼申し上げる。

問題はこれからだろう。思えば1989年、言わずと知れたフランス革命200周年である。この年、天安門事件が起こった。続いてベルリンの壁があつと言う間に崩れ落ち、ルーマニアを初め東欧諸国の大規模な社会主義体制は雪崩をうって崩壊した。その余波は巨大な津波と化して本家本元のソビエト全土を洗いつくした。後世の歴史家たちは、確実に、この年をもって、フランス革命以上に一つの時代の終焉を画する、記念すべき時期とみなすであろう。戦後を生きてきた私たちの世代にとって、歴史はびくともせぬ、不落の、断固たる壁のように聳えていた。その壁が、かくも脆く崩れ去ったのである。国内においても、自民党の一党支配体制、保革対立の図式そのものが鋭く俎上にのせられている。教育の分野においても、激動の80年代を締めくくって大学設置基準の根本的改定が行われた。

問題はこれからである。フランス革命によって確立された近代の理念、価値観そのものが、あるいは空洞化し、あるいは異議申し立てされているのではないかとも思える。ここ当分、先の読めぬ不透明な状況が続くものと覚悟しなければなるまい。大学もまたしかり、ひとり大学のみが安逸の中にとどまっていることは許されない。大学の本質、理念、組織、慣習等々とともに、大学人の意識そのものが鋭く点検を迫られているのである。

ともかく、広島大学の移転はあと2年で完了する。それは私たちが繰り返し主張してきたように、広島大学が長らく引きずっといた戦後と訣別し、真に総合大学として蘇生し、再出発する地點に立つことを意味する。広島大学がいかにあるべきか、大学全体のために研究科はもとより学部・学科はいかにあるべきかの議論が、何にも増して優先されなければならない。

そのようなコンテクストにたって、二つのことを言っておこう。まず大学院重点化、それ自体は大いに結構。ただし、今後はスクラップ・アンド・ビルトが前提になる以上、真に大学全体の活力を生かす方向で考えられなければならない。総合科学部は積極的にこれに参画すべきであろう。同時に、広島大学の全教官が教養教育に参加するという前学長の大綱、そして総合科学部が主としてこれを担当するという通則の条項、両者の折り合いをつけつつこれを実行に移す方途をさぐることである。近い将来、学部の再編成もまた不可避であろう。

この意味において、泥濘の道はまだまだ続く。(1993年7月)

特集 いま改革の時—変われるのか—

飛翔編集委員会ではこれまで「学際性」「コース制」「一般教育」といった観点から総科の存在意義について考えてきた。その中で常に問題となってきたのは“学部設立の理念と現実との乖離”である。すなわち①一般教育の必要性、専門教育とのつながりについて、②総合的知見（広い範囲）を求めることと、専門的知見（深い知識）との統合の困難さ、③コース、カリキュラムなどの制度と境界領域の重視との矛盾があげられてきた。

まず①について振り返ってみると、社会的傾向として一般教育の意義、必要性を認めつつも、専門の重視、一般教育の軽視が大勢を占めてきている。このような中で、総科の理念である「新しいリベラルエデュケーション（“一般教育”）」をどのように位置づけ発展させていくか。一般教育的内容を専門的内にどのように関連付け全体として発展させていくか。②については、「学際性」という言葉の理解がまちまちであること、さらに、その学際性を重視するあまりにカリキュラムがスーパーマーケット化し、個々の講義の関連性が失われつつある。このため系統だった教育・研究の深化が行われず表層化しているのではないか、といった疑念が提示してきた。③については、コースが細分化し過ぎており、コース内でさえ各種群などに分かれ、それらの間の交流がほとんど行われていない。さらに学生にとっては必修科目が多すぎるなどコース内の制約が大きい。これらのこととは、境界領域開発の妨げになっているのではないか。

これらの問題は総科設立当初から常に総科構成員に投げかけられ、考え続けられてきた問題である。そして今、これらの問題を抱えつつ、総科は「大学の自由化」という荒波に乗り出していくかなくてはならない。今一度、これらの問題を意識し、消費者である学生の意見を中心に総科の新しい“改革”について考えていきたい。なお、本誌の編集は7月初旬におこなったため、発行時の状況とズレが生じることをあらかじめお断りしておく。（編集委員会）

I. 大綱化と大学教育

「大学改革」というと、もう聞き飽きた、いい加減にしてくれとお思いだろうか。しかし今現在、ここ広島大学で、総合科学部で、改革への取り組みが急ピッチで進められている。予算獲得、生き残りといった切実な現実問題を含め、まさに「急ピッチ」で変化しつつあるのだ。

昨年4月、この取り組みが具体的な形として示された。いわゆる大綱である。まずはこの大綱をうけての総合科学部の取り組みを概観してみよう。

大綱化と広島大学、総合科学部の動向

生和 秀敏（コース委員会委員長）

大学審議会大学教育部会によって呈示されたいわゆる大学設置基準の大綱化に対応するため、平成4年5月19日、広島大学は「大学設置基準等の改正とともに広島大学の教育研究の整備と改善についての大綱」を決定した。これを受け各学部では、学部設立の理念を生かすため一般・専門といった枠を取り払った新しい教育計画の策定と、それを具体的に実現するための4年間一貫カリキュラムの策定作業が進められている。しかし、これ

までの全学の動向は、一般教育科目的履修単位数を減らして、それを専門教育に振り向けるといった部局化・専門学校化を強めようとしているのが現状である。

学際性・創造性・総合性を旗印に創設されて以来、総合科学部は、これからの中等教育は狭い意味での専門性を乗り越えなければならず、真の一般教育は専門教育との有機的な統合によってしか実施できないと主張してきた。折しも平成7年には、広島大学は、これ

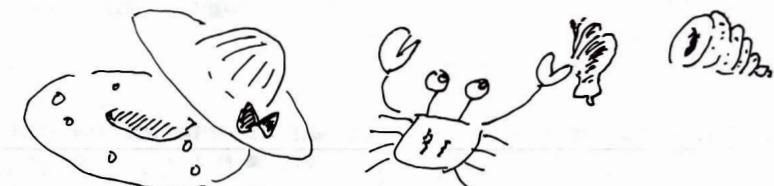
までのタコ足状であったキャンパスを解消し、念願の統合移転を完了する運びになっている。その意味で今回大学審議会が示した大綱化は、旧来の部局の壁を取り払った新しい知的枠組みを大学独自で創造し、それに基づいて広島大学を真に総合大学として機能させる絶好の機会を提供したものと考えている。

総合科学部は、一般教育・専門教育の区分を撤廃し、いちはやく総合科学部で開設されている全ての授業科目を全学に開放することを決め、すでに全授業科目のシラバスを全学に公表した。それと併せて、（1）特定の学問分野に限ることなく、複数の学問分野にまたがる学際的な領域や既存の学問的枠組みを越えた新領域に対する知的関心を育成する、（2）幅広い知識を有機的に統合できる視座と考え方を身につけさせると同時に、あらゆる学問的発展の基盤となる基礎科学を重視する、（3）柔軟な問題解決能力を育成するため、情報収集力・分析力・推理力・批判力・応用力を高める思考訓練を重視すると同時に、

適切な自己呈示能力を高めるため、日本語および外国語の充実を図る、などの教育理念を生かすための一貫カリキュラムの作成を急いでいる。

しかし、総合科学部を取り囲む内外の状況は予想以上に厳しいと見なければならない。評議会決定によって制度的には総合科学部が一般教育（教養的教育と名前が変えられている）の担当責任部局ではなくなったものの、依然として実質的な担当部局である点については大きな変更はない。むしろ、全学の学生を対象とした情報関連科目的開設や実用英語の充実など他学部からの総合科学部に対する要求は急激である。また、総合科学部創設時の4コースが今や8コースへと分化してきた現状を、発展の必然的帰結とみるか創設理念が形骸化してきたことの証左とみるか、内部でも意見の分かれどころである。

新しい飛翔に向けて総合科学部が重大な岐路に立たされていることだけは事実である。率直な御批判と御支援をお願いしたい。



総合科学部のカリキュラムはどう変わるか

稻田 勝彦（コース委員会・一貫カリキュラム検討作業部会長）

大学設置基準の大綱化の最大の目的は、各大学あるいは学部が、それぞれの教育理念に基づき、一般教育と専門教育を区別することなく4年あるいは6年の一貫カリキュラムを編成して教育を行うことを可能にすることである。総合科学部について言えば、現在一般教育科目等54単位、専門教育科目82単位、計136単位以上の履修を義務づけているわけだが、これを一般と専門に分けないことは勿論、一般教育科目の人文・社会・自然分野から各8単位以上、総合科目4単位、外国語科目14単位、保健体育科目4単位という履修区分さえ取り払って、新たな履修区分・単位数を決

め直すことを意味する。だが、これは見かけほど簡単なことではない。

総合科学部が学部発足以来掲げてきたその教育・研究の理念は今後も変える必要はないということでは意見が一致している。また、教養的教育のいっそうの重視という点でも異論はない。問題は、教養的教育と専門的教育との一体化ということを、学生・教官全員の意識のレベルにまで浸透させるにはどうすればよいかということだ。

一貫カリキュラムによる教育を名実ともに実現するために、総合科学部は、まず、開設授業科目の検討を行った。その結果、新授業

科目一覧表では、一般教育科目等と専門教育科目という区分なく、しかもどの授業科目がどのコースの科目であるかという表示もなくなった。総合科学部をはじめ各学部は、この「メニュー」としての授業科目一覧表から、自学部あるいは自コースが必要と認める科目を選んでそれぞれの一貫カリキュラムを編成することになったのである。授業科目のこのような位置づけは、今後の総合科学部の教育体制にも大きな意味を持つと思われる。

各学部は総合・教養、外国語、体育実技、情報関係、専門関連、専門基礎、専門科目という履修科目区分に従って、それぞれ何を何単位履修させるかをほぼ決めているが、総合科学部はこれに関しては日下鋭意検討中である。しかし、おおよそ次のような履修基準が考えられている。まず、履修総単位数は136から124に減らす。履修区分としては、教養科目、専門科目等の名称は用いないで、必修・選択必修・自由選択という区分を基本とする。必修としては「特別研究」(6単位)。なお、過年次生の9月卒業の道を開く)のみとし、「現代思想」「プログラミング通論」「体育実技」「保健体育理論」は必修からはずす。た

だし、学生が諸問題を自発的に掘り起こし、発言できる能力を養うための授業科目、たとえば「総合ゼミ」「国語表現法」等を必修として課すことの是非が真剣に検討されている。選択必修としては、「総合科目」「外国語科目」(2カ国語以上)、「外国語特別演習科目」および各コースが定める選択必修科目がある。もちろん、各コースは独自に必修または選択必修科目を設けることはできる。自由選択としては、履修単位を大きく二つに分けることになるだろう。一つは、学部共通として履修を義務づける「教養的科目」の単位、他の一つは「専門的科目」として履修すべき一定の単位である。特に前者はしっかりと理念のもとに検討されないと、教養的科目の軽視につながることになる。後者については、一定の制限を設けつつも、他学部の授業科目を積極的に履修する方向で検討されている。さらに、コースあるいは群へと分極化の傾向を強めてきた本学部の組織とカリキュラムを1学部1学科の理念に近づけるには何がなされなければならないかなど、検討すべき問題は多い。

現在の総合科学部・履修細目(社会科学コースの場合)

区分	履修区分	科 目 指 定	単位数
一般教育科目	人文 分野	8以上	36
	社会 分野	8以上	
	自然 分野	8以上	
	総合 科目	4以上	
外国語	初 修	6	14
	既 修	6	
	専門科目の振替	2	
保健体育	理 論	保 健 体 育 理 論	2
	実 技	体 育 实 技	2
専門教育科目単位数合計	必修	全コース	6
		特 别 研 究	6
		現 代 思 想	2
	共 通	プロ グラ ミング 通 論	2
		外 国 語 特 別 演 習	4
	コース内修	社会 科 学 外 書 講 読	2
		社会 科 学 方 法 論	2
		社会 科 学 そ の 他	82
	選択必修	社会科学コース選択必修科目の中から選択し単位以上を含む単位を選択する。	34
	自由選択	他学部の授業科目を12単位まで含むことができる。	30
単位数合計			136

注1 外国語科目の「専門科目の振替」は、各自が選んだ二つの外国語のいずれかによる。

注2 選択必修、自由選択、計64単位の中に本学部の自コース以外の授業科目12単位を含まなければならぬ。

教養的教育を大事にしたい

田中 裕子(編集部: 1年)

広島大学総合科学部入学してはや数ヵ月、もう何年も経ったような気がする。去年通学していた私立某K大学から、すべてを投げうって、何かを求めて、そう、その何かはよくわからなかったが、とにかくこの総科に飛び込んだ。そしてその結果は?まだ答をだすには時期が早すぎるかもしれない。しかし、一つだけいえることがある。それは総科の一般教養に対する抱擁力の大きさである。

さて今回話題の大綱化だが、主な点を3つをあげると①一般教育科目と専門教育科目の区分を取り払う②教養的教育と専門的教育を全学年間に一貫及び調和的に複合させる③二つの教育を全教官が担当するといったところである。私はまだ1回生なので総科の一般教養と専門のかねあいをよく知らないし、コースにおける改善点も実体験していないので、その点についての大綱化とのかかわりは書けない。しかし去年の体験を生かして、一般教養と大綱化について述べてみたいと思う。

☆

大綱化での一つの大きな特徴は、専門を早期にとりいれるということである。ということは必然的に一般教養はその分割される。これについては大学は高度一般教育的であるか、大学院レベルの専門を早くとりいるべきか、と多々意見があつて一概に善し悪しは言えないのが実情である。しかしどうも今回の大綱化では一般教養を軽視する考えがみえかくれるのである。

K大学と比較して総科は一般教養を非常に重視している。それは何を示しているのか?やはり幅広い知識をもつ人材の養成であろう。学部的な違いはあれ、どの学問分野においてもそれは要求されるものだが。例えば総科ではほとんど自由に一般教養を選択することができる。なんと同じ教科で先生まで選択できるではないか?これはK大学では考えられなかつたことである。そこでは最初の日一枚の

区分	必修	選 択 必 修	自 由 選 択	単位数
G 1	社会と生活 8 (体育実技含む)			
S 1			8	4 6
G 2	社会科学コース 選択必修科目 34		1 8	5 2
S 2	社会科学外書講読 6 〃 基礎演習 2 〃 演習 4 外国語特別演習 4		4	2 0
特別研究	6			6
単位数	6	8 4	3 4	1 2 4

(注)総合科学部では全開講科目をG 1、S 1、G 2、S 2という四つに分類することが検討されている。G 1:基礎的で教養的科目。S 1:基礎的で専門的・各論的科目。G 2:高度な教養的・統論的科目、履修年次は原則として2年次以降。S 2:高度専門的・各論的科目、履修年次は原則として2年次以降。

なお、この試案は7月初旬における社会科学コース試案であり、今後大幅に変更される可能性がある。名称等も全て仮称である。

紙を手渡された。「なんじゃこれは」とみてみるとなんと時間割表である。これでは小学生とあまりかわらないではないか。講義概要には多くの先生方の興味深い講義が並べられてあったのでドキドキしていたのに、指定先生のもとでの指定授業を150人の同じ学科の子が全員受講しなければならなかった。そして40%をしめる専門の授業。その分一般教養の取得単位の数はやはり総科にくらべ少なかったと思う。その大学では理工学部原子炉工学科だったのだが、そんな多分に社会性を含み、環境への多大な影響を与える分野において、原子炉の工学的構造ばかりやっててよいのか。もっと幅広い視野を必要とするのではないか?大学側の姿勢はすこし硬直すぎているのではないか?と思えてならない。あえて言うならば、原子力を学ぶものは、社会科学から生物学とあらゆる分野を学んで、自分の扱う技術の重要性を認識してほしい。

「基礎工学〇×」「原子力工学概論」「金属」といった専門教育が一般教養のかわりをはたすと言うのだろうか。そしてあの数少ない一般教養で何ができるというのだろうか。総科ではそれすべてを一般教養の面においてフォローしているといつても過言ではない。

☆

さて今回の大綱化であるが、この総科の利点を生かすことができるのだろうか?また生かす努力をするのであろうか?それが不安である。そして一つ言わせてもらうと、どうも勝手にやってるなあといった面がある。自分の属する大学、学部が今、大きく動こうとしているのである。その大学の主人公である私たち学生がなにもしなくていいのだろうか?学生の意見もきかず勝手にシステムをかえていいのだろうか?学生の意見をまとめそれを知らせることができる機関(そう、大学が一番嫌っているあの自治会のこと)をつくることが重要ではないのだろうか、と思うのだが。

II. 現場の声 学生の思い

時間割の作成。年2回の行事である。必要な単位はそろうのか。おもしろそうな講義はあるだろうか。取りたいのが重なっている等々、制度面の不都合を実感するのがこの時である。「ここところがこんなふうに困るんだ」と声を出して言ってみよう。それが制度の改革に実質を与える第一歩なのだから。

ここでは時間割作成の現場からの声を3人のケースについて紹介する。さらに、総合科学部への期待や意見を述べてもらった。

ケース1：

川村 由紀（地域文化コース3年）

今回の時間割を組むにあたって留意したことは、専門に集中できるように、つまり専門分野において理解を深めていくことができるよう、必要最低限の講義・演習を取るようにしたことです。ですから、時間割表にはかなりランダムに空きコマがあります。必要最低限なのですが、教職の専門科目が予想以上にあり、自分の考えていた時間割とはかなり違ったものができました。

時間割を組む際に不都合な点といってまず思い浮かぶのは、「履修しなければならない講義」と「履修したい講義」が重なるという事態です。教職免許を取得しようとする場合、教職の専門科目と自分の専門科目が重なってしまうこともあります。この問題はある程度仕方のないこと、割り切ってしまうしかないように気がします。次に、実際、時間割を組んでいく時に頗りとするのは講義概要ですが、時間割を組む際の不都合な点というのは、かなりこの部分もあると思われます。なぜなら、講義概要の内容説明と実際の講義内容が噛み合っていないことがしばしばあるからです。特にある教官の講義を初めてとなる場合、授業科目名と講義概要のみによって選択することもあるので両者のズレは不都合ではないかと思います。

授業あるいは演習内容の良い点ですが、問題意識を持つきっかけとなることがあるということでしょうか。一般教育での疑問がそのまま専門につながることもあるでしょうし、卒論のテーマにつながることもあるでしょう

ケース1：川村由紀さんの時間割り

	月	火	水	木	金
1		青年期 発達論			英語会話 演習 II
2	道徳教育 原論	アメリカ 社会文化研究 文化人類学 基礎論	文化人類学 社会科 教育学概論	社会科 人文学 地理学	
3		社会人類 演習	地域学		
4	宗教人類学 演習	文化 交流論 地理学	社会・経済 地理学	女性学 特別演習	英語聴取法 演習 I
5	教授 心理学				

し、更には将来の道にまで影響を与えるかも知れません。何事に関しても、社会でしか得られない刺激があるように、大学でしか得られない刺激もあると思います。また、概論やその類いの講義は、その分野の大きな流れをつかむのには適しているでしょうし、その延長線上の詳論や演習は特定の分野の理解を深めていくことができるよう系統立てられているように思います。

しかし、系統立てられてはいるものの、分野別に開設されている講義の数はそう多くないよう思います。講義の内容そのものについては、概論など特にそうですが、とても半期では把握できない量をこなしていくことになるので、実際、自分のものとなっているのかどうかは疑わしいところです。内容が浅く広くなってしまうのは、開設されている講義数と関係があることは容易にわかります。講義数が増えれば履修しなければならない講義が増えることもありうるので、それが必ずしも内容の深化につながるとは思いませんが、現在一つの講義・演習で教授されている多くの内容をいくつかに細分する、あるいは、半期を一年にすることは、やはり内容充実のための一つの解決策ではないでしょうか。

ケース2：

東谷 陽子（物質生命科学コース3年）

今回授業を選択するうえで困ったと感じたのは、同じ時間に受けたい授業が2つ以上重なったときだった。これには単純にあげて3つのパターンがあった。

1. コースが異なっていて、受けたい授業がある場合

たとえば、「女性学」と「微生物生理学」（水、3・4時間）のどちらを受けようと悩む。この場合、自分が理系であり、「理系が文系の授業をとるなどもってのほか」とおっしゃる先生もいることから決心はついた。

2. セメスターが異なる場合（選択必修科目）

2回生の時に選択必修科目を見逃していて、「しまった」と思ってから受けたいと思って同じ時間にやはり選択必修が入っている場合のことである。前期にはなかったが後期にはある。「生命科学外書講読（6セメ）」と「生物物理化学（3セメ）」である。後者は2年の時に重なっている他の授業をとつて、後に大変悔ることになる。だがもう遅い。あとは変更を期待するのみ。

3. 分野が違う場合（選択必修科目）

私は物質生命科学コースに所属しているが、その物質生命科学コースの選択必修科目に含まれる「量子力学I」と「超微形態学」（火、3・4時間）が重なっている。物質生命科学コースのなかが物質系と生命系に分かれているからだろうが、生命系のなかにはこの選択に悩む人もいた。私（元文系生物）は悩まなかったが。

1年生の時には、受講者が多いためにクラス分けされた英会話と、指定の物理、一般化學がそれぞれ重なっていた。そういえばこの英会話と細胞生物学Aが重なって天野先生が怒っていたときもあった…などという事もなかなか思い出す。

次に授業について。まず「生体防御学」。これは不幸にも教職と重なっているためか、

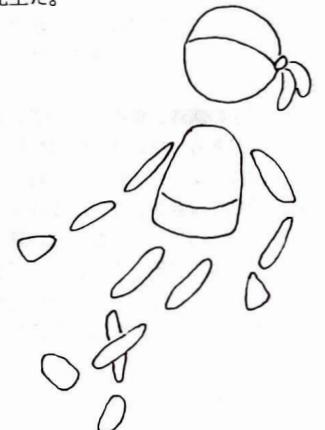
ケース2：東谷陽子さんの時間割り

	月	火	水	木	金
1	神経 行動学	脳生理学		行動 制御論	生物物理化 学
2	生体 防御学	超微 形態学	微生物 生理学	形態 形成論	環境化 学
3	物質科学 概論 I		生化学	生命科学 実験	生命科学 実験
4	風俗史	生命科学 外書講読 I	博物館学	↓	↓

学生が一ヶタしかいない。しかし、本題である免疫学は将来のみならず日常生活にもつながる大切かつ興味深いもので、本来ならばこんな少人数で聞くにはもったいない内容だ。

「脳生理学」。普段生物をいきなり分子レベル、細胞レベルで考える授業が多いなか、生物の観察から始まってそれを掘り下げていくという、大切で基本的な生物へのアプローチ法を教えてもらえる授業。同じことは「神経行動学」にもいえる。

最後に文系の授業なのだが、「風俗史」。この授業の先生は自分の研究内容を目を輝かして話される。情熱がひしひしと伝わる。将来何をするにしてもこんなに自分の研究内容に愛情が注げたら、と思わせてくれる素晴らしい先生だ。



ケース3：

川口 優子（自然環境研究コース3年）

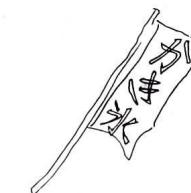
自然環境研究コースでの専門教育科目のうち、語学以外で、必ずとらねばならず、しかも他の授業では代わりにできない講義がいくつかある。プログラミング通論、現代思想、環境科学実験Ⅰ～Ⅳである。実験は4単位のうち3単位以上となっているが、月・火でセットとなっており、実験のかわりに他の講義がとれるようにならない。3単位だけをとるために、後期の前半か後半かをさぼるしかないわけである。

ここで問題なのが、この3つの授業の集中である。セメスターは違うが、プログラミング通論は火曜4コマ、現代思想は火曜3コマ、環境科学実験は月曜と火曜の3・4コマとなっている。すべて火曜の午後である。

つまり、プログラミング通論は2セメだから2回チャンスがあるが、現代思想は4セメで、一発勝負で、落とすと4年生（もしくはそれ以上）でとるしかないわけだ。さらに火曜の午後には他にも計算機、行動科学、健康科学の実験が入っているので、数理と生体の人も同じく一回でとらねばならない。

そもそもどうして必修の科目が火曜に集中するのだろう。先生方の都合がいい日なのか。それとも出席率がいい日だからか。理由は分からぬが、必修の講義はできるだけ分散させてほしい。

その他、理系の講義が集中する時間とまったくない時間がある。例えば前期の金曜4コマは理系の講義がまったくない。それから、一コマ目は総じて講義が少ない。さらに、土曜日は講義がないので、残った時間に講義が集中している。さらに理系だと、実験がある時間には講義があまりないので、一層集中が進む。そして、講義が重なれば重なるほど時間割は組みにくくなる。



ケース3：川口優子さんの時間割り

	月	火	水	木	金
1		自然 保 護 学			地下 資 源 論
2	集 行 動 論	超 微 形 態 学	微 生 物 生 理 学	化 学 エコロジー	環境化 計 制
3	環境 科 學 實 驗 I・II	環境 科 學 實 驗 I・II	環境 科 學 外 書 講 讀	地中 水 學	氣 象 學
4	↓	↓	↓	社会 經 濟 地 理 學	確立 統 計 序 說
5					自然 環 境 演 習 III

また、時間割を組むときに困るのは、前年度と講義の配置が違うことである。移転等の条件の変化があるので仕方がないが、いくつか選択必修の授業が重なっていて、こっちの講義は来年とろう、と思って見送ったら、次の年にはその講義は実験の裏に移動していて、手も足も出せなかつた、ということもある。

基本的には、総科は他学部よりも自由に時間割が組める。講義の内容も種類が豊富で、単位の取り方もある程度幅がある。しかし、特に理系にとっては、実験のある時間は他の講義を取ることは不可能であり、実験の裏に入った講義はあきらめるより他はない。これが時間割を組む際に一番困る所である。講義が重なるだけなら、3年までになんとかできる場合もあるが、講義が重なってさらに実験が重なったり、必修科目を落として次の年には同じ時間に実験が来たりするとどうしようもない。

もし時間割を再編する考えがあるなら、火曜の午後をぜひどうにかしていただきたいものである。

異論・反論・Objection

その1：

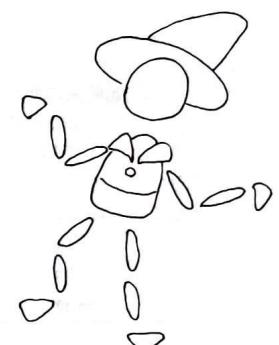
「総合科学部」に対しては、私個人としても色々な注文があるのだが、まずは素朴な疑問から。「総合科学部でやっていることは、果して総合科学なのか」。確かに扱う領域は広いのかもしれないが、それが即、「総合科学」だとはいえないであろう。「総合科学」とは何であるのか。考えてみると、「総合科学」とは実に曖昧な言葉であることがわかる。何とでも言えるのである。だからこそ、自分の学問をしっかり見つめることができないならば、「総合科学部」にいる意味は少なくなるだろう。自分自身でもって、自分自身の「総合科学」を創ることが重要ではないだろうか。しかし、そのようにすることは意味では困難かもしれない。そこで私が言いたいのは「もっと想像力を使おう」ということである。「想像力=創造力」であると私は思う。既成の概念にとらわれず、「こうであってもいいのではないか」と学問領域の枠を自分で拡げてみるのだ。そして、自分自身の学問を創れたらすばらしいと思う（なんたって、自分自身が創始者！）。結論を言うと、「総合科学部」で「総合科学」をやるのは各人の「自由」である。そして、「総合科学」という言葉 자체にあまり意味はない。だから、自分で考えずに見かけのイメージにひたって行動が伴わない、なんてことにならないように気を付けねばならない。

さて、私たちが「総合科学」をするために「総合科学部」では8つのコースがあるが、これが曲者で、「総合科学」を自分で組み立てての制限をつけているように見える。自分のやりたいことをやるのに、何から手をつけたらいいのか、又、こういうやり方もある、ということを知ることができるのは良い面であろうが、どのコースの枠にも当てはまらない、という者にとって非常に不都合なものとなる。私を例にとってみると、「物理と哲学と心理学などを融合して、現象のすべてを証明できるような学問を創るのら」と訳のわからんことを言っているのだが、人間

文化コース、生体行動コース、物質生命科学コースの講義を均等にとるのはやはり苦しい。さらに我慢をいえば（我慢だろうか？）、もっと実技をいれてほしい（音楽実技とか。これは切に願う）。とにかく、「～論」とかいつて、論じるだけでは不充分だ。「芸術家養成」もできるぐらいの講座を設けてほしい。

つらつらと書いてきたが、最後に一言。「『想像力=創造力』（いかにも『真実』らしいではないですか！）です。もっと自分の精神を解放して、自己実現に向けてさらなる一步を踏み出しましょう！（なんてね）」

（岸本孝子：人間文化コース2年）



その2：

ここでは、総科の意義と問題点、また、大学全体に関わる問題についても私が考えることを述べる。

□総合科学部の意義□

第一に、総合的知識の獲得が挙げられる。学生は、自分の興味に従って、いろいろな授業をとり、いろいろな知識を得ることができる。これは、私が総科に来る上で最も魅力を感じたことである。そして、総科に来た人の多くが同じ思いだっただろう。

第二に、人間形成の面である。総科の学生・

教官には、いろんな個性をもち、いろんな考え方をもつ仲間と接する機会が特に与えられている。したがって広い視野をもつことができるし、自分と異なる意見をもつ人を尊重できるようになるだろう。また、ある一つのことだけに精通している人は、物事を全体として認識することができない。そのような人は、ある先端的な知識を要するときには役に立つが、他の大部分のことにはあまり役に立たない。広い知識をもっている人は、物事を多角的にとらえることができる。よって、多くのことに対処できると言える。

第三に、問題解決のための学問ができるということである。今の大学の学問の多くは、教授の知的好奇心を満たすことだけのためになされている。それが「悪い」ことだとは私は思わない。しかし、学問が、自然・人間・社会を分析し、理解しようとするものである以上、これらに奉仕するということをわれわれは忘れてはならない。問題解決のための学問をやるために、狭い専門分野だけやっていたのでは到底だめである。社会問題にせよ、環境問題にせよ、それらはいろんなしきみが様々に関わりあって起こるものである。ここ

で、総科のメリットである総合的知識を得るということが役に立ってくるのである。総合的知識をもち、いろんな角度からものを見るこことによって、問題の解決策が見えてくるのである。

それでは、総科の現実が、総科の意義を強固にするものとなっているのかということを考えにいれながら、総科の問題点について考えてみたい。

□コース制について□

●コースの細分化

コース制は、当初地域文化・社会文化・情報行動科学・環境科学の4コースでスタートした。昭和61年度、地域文化・社会科学・外国語・数理情報・物質生命・自然環境・生体行動の7コースに改組され、平成4年度人間文化コースが作られ、全8コースとなった。

なぜ4コースから8コースにコース編成が行われてきたのかを見てみると、第一に仲間うちでまとめて教育したいという教官の要望があり、第二に総科の定員を増やすためのアピールとしてなされたということがわかる。

しかし、仲間うちでまとまるということは総科の理念に反することである。また、幅広く興味のあることを学びたいという多くの学生の要求にも反することである。学生も教官も、狭いコースの枠内に閉じこもっていると、他の分野をやっている友達や同僚とのふれあいの機会が少なくなるし、自分の視野を狭めることにもなるのではないか。

細分化したコース制は見直されるべきだ。

●コース内の細分化

例えば、地域文化コースのイギリス研究群は、近年学生が一人も入らないか、入っても一人という状況が続いている。そのようになつてまで狭い枠に閉じこもろうとするのはおかしい。これは他コースにもいえることである。

●コース定員

今年も、何人かの人が第一志望のコースに入れなかったが、これでは学生の好奇心の芽を摘みとってしまうことになる。コース定員をなくすことはできないのか。そうでなくとも、コースを少なくすれば一コースごとの定員が多くなるので、あるコースだけ極端に人が多いということは避けられるのではないか。そうすれば、ほぼ学生は希望どおりのコースに行けるだろう。

□必修・選択必修について□

必修・選択必修単位の合計はコースによつて48~62と差がある。しかし、専門科目の単位の約3分の2が必修・選択必修であるといふ事実は変わらない。これは、いろいろなことに興味があって、専門に縛られたくない人が多いと考えられる総科にあるまじき姿であるし、これでは、総合的知識を得て、多角的な考え方を身につけるという総科のメリットが達成しづらいのではないか。専門を深めるだけだったら他学部でもできることだ。必修・選択必修の単位を少なくし、学生の自主的な選択にまかせるというのが総科のるべき姿ではないだろうか。

こういうことをいうと、広く浅い知識しか学生は得られないといって反対する人もいるだろう。しかし、いくら学生がいろんなことに興味をもっているといつても、すべての分野に一律に興味がある人などいない。必ず、主に興味のある分野があるはずである。例えば、自分は主に自然環境に興味があるけれども、他のこともいろいろ興味があるというような人が多いはずである。だから、必修・選択必修の単位を少なくしたからといって、学生がその分野を学ばなくなるということはない。その学生はその分野に興味があってそのコースを選んだのだから。もし、やりたいことがまったく決まっていない学生がいても、ある分野だけを半強制的にやらせるより、いろんな授業をとらせた方がやりたいことを見つけられる可能性が高いと思う。

最後に、各コースの必修・選択必修科目の履修基準(平成4年度)の特徴をみてみると、理系のコースは、選択必修の単位が多く、時間と割に単位が少ない実験が含まれるので、かなり制約されるといえよう。実験の少ない数理情報科学コースも、選択必修が50単位必要なので制約が大きい。文系の中でも地域文化コースと外国語コースは、必修が多く、選択必修科目の選択の幅が狭いので、制約が大きい。

次に、総科だけではなく、大学全体にも関わる問題について述べる。

地域文化コース選択必修科目群					
I群 日本研究 授業科目(講義題目)	II群 アジア研究 授業科目(講義題目)	III群 ヨーロッパ研究 授業科目(講義題目)	IV群 イギリス研究 授業科目(講義題目)	V群 アメリカ研究 授業科目(講義題目)	VI群 民族社会研究 授業科目(講義題目)
地域研究基礎演習	地域研究基礎演習	地域研究基礎演習	地域研究基礎演習	地域研究基礎演習	地域研究基礎演習
日本地域研究B	アジア地域研究演習	ヨーロッパ地域研究演習	イギリス地域研究特別演習	アメリカ地域研究特別演習	文化人類学基礎論
日本地誌	アジア地域研究特論	ヨーロッパ史研究	イギリス史地研究演習	アメリカ地域研究演習	文化人類学特論
社会・経済地理学	アジア地誌	ヨーロッパ史研究演習	イギリス史研究	アメリカ史研究	文化人類学演習
日本民俗学	現代中東研究	キリスト教学研究	イギリス史研究特別演習	アメリカ史特別演習	宗教人類学
日本地域研究実習	現代中東研究演習	キリスト教学研究演習	イギリス史研究演習	アメリカ史研究演習	宗教人類学演習
日本史研究	アジア史研究	ヨーロッパ哲学思想研究	イギリス文化研究	アメリカ社会文化研究	社会人類学
日本史研究演習A	アジア史研究演習	ヨーロッパ哲学思想研究演習	イギリス文化特別演習	アメリカ社会文化特別演習	社会人類学演習
日本史研究演習B	中国史研究	ヨーロッパ社会文化研究	イギリス文化研究演習	アメリカ社会文化研究演習	社会人類学演習
古文書学演習	中国史研究演習	ドイツ文化論特別演習	イギリス文学研究	アメリカ社会文化研究演習	民族誌
日本文化史	アジア民族学	フランス文化論特別演習	イギリス文学特別演習	アメリカ文学研究	民族誌演習
日本思想史研究	アジア民族学演習	ドイツ文学研究	イギリス文学研究演習	アメリカ文学特別演習	発展途上社会研究I
日本思想演習	中国文化論A	フランス文学研究	イギリス政治経済研究	アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究I演習
日本古典文学研究	中国文化論A演習	ドイツ文学研究特別演習		アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究II
日本現代文学研究	中国文学論特別演習	フランス文学研究特別演習		アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究II演習
日本古典文学研究演習	アジア政治経済研究	ドイツ文学研究演習		アメリカ政治経済研究	文化変容論
日本現代文学研究演習	アジア政治経済研究演習	フランス文学研究演習		アメリカ政治経済演習	民族社会研究特論
日本語表現論	アジア宗教人類学	ヨーロッパ現代研究A		アメリカ政治経済研究	日本民俗学
日本語表現論演習	アジア宗教人類学演習	ヨーロッパ現代研究B		アメリカ特殊研究	■国際開発論I
		ヨーロッパ現代研究B演習		アメリカ特殊研究演習	■国際開発論II
					■異文化間コミュニケーション論

六群に分かれた地域文化コース

地域文化コース選択必修科目群	
V群 アメリカ研究 授業科目(講義題目)	VI群 民族社会研究 授業科目(講義題目)
地域研究基礎演習	地域研究基礎演習
アメリカ地域研究特別演習	文化人類学基礎論
アメリカ地域研究演習	文化人類学特論
ヨーロッパ史研究	文化人類学演習
ヨーロッパ史研究演習	宗教人類学
キリスト教学研究	宗教人類学演習
キリスト教学研究演習	社会人類学
ヨーロッパ哲学思想研究	社会人類学演習
ヨーロッパ哲学思想研究演習	宗教学
ヨーロッパ社会文化研究	宗教学演習
ヨーロッパ社会文化研究	社会人類学
ドイツ文化論特別演習	社会人類学演習
フランス文化論特別演習	社会人類学演習
フランス文化研究演習	社会人類学演習
イギリス文化研究演習	社会人類学演習
イギリス文化特別演習	社会人類学演習
イギリス文化特別演習	社会人類学演習
イギリス文学研究	社会人類学演習
イギリス文学特別演習	社会人類学演習
イギリス文学研究演習	社会人類学演習
イギリス政治経済研究	社会人類学演習
イギリス政治経済研究	社会人類学演習
アメリカ文学研究	民族誌
アメリカ文学特別演習	民族誌演習
アメリカ文学研究演習	民族誌演習
アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究I
アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究I演習
アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究II
アメリカ文学研究演習	発展途上社会研究II演習
アメリカ政治経済研究	文化変容論
アメリカ政治経済研究	民族社会研究特論
アメリカ政治経済演習	日本民俗学
アメリカ政治経済研究	■国際開発論I
アメリカ政治経済研究	■国際開発論II
アメリカ政治経済研究	■異文化間コミュニケーション論

注) ■は他コースの授業科目(講義題目)を示す。